郷土室だより

第45号

昭和59年9月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 543-9025

八町堀襍記（ざつき） 五

安藤菊二

5 地区の居住者

原胤昭翁は八丁堀懐古談の中で、町奉行附与力の八丁堀の拝領屋敷は三百坪から五百坪あり、随分手広に邸宅を構えても半分は不用地だったので、半分は借地人に使用させた。しかし、その借地人の身分業種を特定して、商人の居住を許さなかったので、江戸八百八町の中でも特殊な一廓が出現して、八丁堀地区には、医者・儒者・手習師匠・国学者・書家・画家・歌人・俳人・俳諧師・茶の宗匠・能役者・狂言師・謡の師匠、又は盲人の検校・勾当・座頭の坊・按摩鍼医、それから浪人もの剣術柔術槍術馬術の指南者、金銀座役所の役人などが住んでいた。殊に面白いのは相撲取り、そのころ横綱で名高かった響潟は、わたしの屋敷の北隣に居たので、わたし共は毎日稽古相撲を見ました。と語っている。

（『江戸時代文化』一巻五号おけいこと手習）

× × × ×

古い頃の記録は散逸して不明であるが、幕末近い頃の八丁堀与力屋敷の居住者については、中村静夫氏の「新作八丁堀組屋敷図」でこれを知ることができる。その一部分を引用しよう。

中田郷左衛門屋敷—伊藤揣三（医）、渡辺雄伯（医）、東山隆渕、英一蜻（画）、芳野五蔵、松本貞蔵。

下村弥助屋敷—杉浦勾当。佐藤文仲（医）豊永勾当。

佐野十郎左衛門屋敷—遠田澄庵（医）、宇野玄廸、平井宗二、馬場玄民。

東条八太夫屋敷—芭蕉堂（俳）、小松原翠湖（画）、戸塚静海（医）、伊藤少介。

秋山久蔵屋敷—高松勾当、鈴木道順（詩）、鈴木良庵（医）。

中村又右衛門屋敷—山藤検校、二藤三拙。

佐久間弥太吉屋敷—茅野雪庵（書）、湯浅堯民（医）、鳥海良琢（医）。

原善右衛門屋敷—保原検校、溝部有山、同有謙、松寿堂。

原鶴（ママ）円門屋敷—太田元礼（医）、藤島勾当、河辺東山（医）、鴨池元琳（医）。

仁杉八右衛門屋敷—渡辺東林（医）、小泉仙竜（医）、屋代貢。

中村又蔵屋敷—小島純蔵、岡沢真庵

中田孫三郎屋敷—高林信好、藤堂凌雲（画）。

徳岡五三郎屋敷—岸渕蔵、保沢勾当

後藤斧二郎屋敷—岡島林斎。

松原晉三郎屋敷—喜多武清（画）。

村井亀太郎屋敷—横川七郎（刀法）。

中村八郎左衛門屋敷—渋谷深良（医）、岩井元教（医）。

由比義三郎屋敷（六軒屋敷）—鹿島勾当、高橋玉焦（女優）、飯塚検校。

吉田駒次郎屋敷—豊田幽雅（和歌）

（以下省略）

加藤千蔭肖像（東京国立博物館蔵）

＜イ 国学者・歌人＞

八丁堀の地主である与力同心の中にも歌人として又書家として名を得た人

がいる。加藤枝直やその子千蔭は、その優なるものである。誰でも知っている名家であるが、名家だからといって除外しては格好がつかない。ここには逸見仲三郎氏の『慶長以来国学者史伝』（大正一五年刊）に書かれた伝記を載せておこう。

○加藤枝直（えなお）

枝直は、加茂真渕の門人にして、江戸町奉行の与力なり。幼名を為直といひ、通称は又兵衛、芳宜園と号す。伊勢国の生にして、橘氏なり。中世故ありて、藤原を以て称せり。枝直に至りて又旧に復す。少にして江戸に出で、与力となりて、町奉行大岡忠相に属す。壮なるに及びて、好んで歌を詠じ、文を属し、暇あれば常に書籍を繙き、県居大人の江戸に在りし時、その情交甚親厚なりき。終に大人の居を己の邸中に移し、以て文学の教授を受くといふ。枝直年七十二を以て仕を致し、朝暮只歌を以て意となせり。故に益其の妙を極めて、名声高く、従ひ学ぶもの甚多かりき。年八十にして、自詠中その得意のものを撰み、自、東歌と題し六巻と成す。後千蔭これを刊行し、専世に行はれたり。天明五年八月十日歿す。年九十四なり。本所回向院に葬る。枝直の詠歌は、天性の妙に出でゝ、詞花言葉をもとゝせず、誠実を旨とせり。その著書は左の如し。

新撰梅曲　享保御定書立案　東歌子に与ふる文　改世観世流謡曲　青木氏推薦事実　古を好とほこるをにくむ説

○加藤千蔭

千蔭は、加茂大人の門人にして、姓は橘、通称は又左衛門なり。芳宜園、耳梨山人、逸楽窩江翁等の号あり。父は枝直といひて、幕府の町与力なり。千蔭初父に学びて歌をよくし、後に県居の門に入りて皇朝の学を学び、歌文と筆札とを能くするを以て、門下に称せらる。後父の職をつぐに及び、吏務叢委すといへども、猶且歌文を研究して怠らず、天明八年病を以て職を辞し、力を好む所に肆にし、老いて益その業進みたり。八丁堀に住み、学徒に教授す。門下集る者数百人に及ぶ。戊花（うけらがはな）と名づくる集ありて世に流布し、且愛読する者少からず。千蔭は、最本邦古言の義に精し。官その著す所の萬葉集略解を上らしめ、賞して銀錠若干を賜ふ。此に於いて名声益著れたり。兼ねて能筆を以て称せられ、松花堂又入木堂の風を摸して一家をなす。又画を建部綾足に学ぶ。揮ふ所は扇頭紙尾といへども人争ひて之を珍重す。天明八年老を告げて、家を子某に譲り、益学問の道を勤め、その名海内に轟きぬ。ここを以て諸侯の招きも多かりしが中に、浜田侯最この人を慕はれけり。文化五年正月墓参のをり、橘千蔭の墓と自筆にて題せし片紙を、回向院の住持にわたして言はるゝやう、吾なからむ後はこれにて表し給へかし、生前に好まぬ事を、身後なりとて誣ふるは宜しからぬなどいひて、托しおきて帰られけるとぞ。かくてその年九月二日に歿す。年七十二なり。回向院に葬る。

千蔭の文名は春海に下らず、その文章と和歌とは、うけらが花に載せられたり。今これを春海のに比較する時は漢学の力薄ければにや、稍遜色あるが如しといへども、尚決して一名家の文たるに恥ぢざるなり。（中略）

又著書を挙ぐれば左の如し。

萬葉集略解　新百人一首　古今集序考　大歌所御歌記　月並消息　ゆきかひぶり　うけらが花　新撰月百首　香取日記　玉川紀行

○村田春海

春海は、加茂真渕の門人にして、姓は平、通称は平四郎、字は士観、春海はその名なり。春道の二男にして、兄を春郷といひ、父子三人共に県門に入り、春海最も名を得たり。織錦斎、織錦乃舎、織錦翁、琴後翁などの号あり。初漢学を修めて詩文を能くし、又蹴鞠に妙なり、後県門に入りて、本邦の古典を学び和歌を能くす。その文章に至りては紀氏以来の能文家を以て称せられ、敢へてこれに敵するものなかりきと云ふ。これ畢竟漢学に心を潜めて、服中英、鵜士寧、皆川淇園等を師とし吉田学儒安達文仲等と交り、博雅淹通にして学和漢を兼ね、その文を作る、法則を唐宋八家にかり、詞をわが古文に採り、取捨折衷して別に一家の体を成すを以てなり。然れども性豪放にして理財に疎く、身富豪の家に生れ、家兄に代はりて家を督し、終に家産を蕩尽してこれを顧る事なし、専心を文学に用ひ、老いて益精しく、加藤千蔭と名を等しくし、倶に江戸の宗匠と称せらる。故に門下となりて業を受くる者甚多し。本居大人常に日はく、都に歌人蘆庵あり、東に文人春海あり。わが企て及ぶべき所にあらずと、以てその能文なりし事を知るべし。（文例省略）

白川侯その才を愛して、月に五口俸を賜ひ、召して侍問とせらる。……

又筆札を善くし、詩文等を録するに至りては、米元章の風趣ありといふ。文化二年三月、京都妙法院の宮、輪王寺座主として江戸に下向せられし時、和歌の事を以て春海を召さる。この時加藤千蔭画人谷文晁も亦召されけり。

春海後に仙語記一巻を以て詳にその時事を記せり。八年二月十三日歿す。年六十六なり。深川本誓寺に葬る。その王昭君を詠ぜし長歌は、よく人口に膾炙し、保育唱歌となりて、雅楽取調所の伶人にうたはる。（歌詞省略）又その著書を挙ぐれば左の如し。

神道志　歌苑類題抄　和学大概　斎明紀童謡考後案　仮名拾要　五十音弁語　明道書　わかゝつら　不問語作文通弊一名時文摘批　歌語　宇合称呼考　字鏡考証　仮名大意抄　西土国習考　椿詣記　琴後集　怜野集拾遺織錦雑記　古人贈答歌抄　仙語記答和泉真国書　筆のさが　与稲掛大平書（以上『慶長以来国学者史伝』による）

○山本正臣

京都の人山本正臣も、江戸に出てしばし八丁堀に家居した。南部盛岡の人、黒川盛隆の随筆『松の下草』に次のような記事がある。

山本陸奥介正臣は面白き人也き。面色貌様など福助といふ人形に似たりき。此人は元櫛笥殿の雑掌にて、京都少し不首尾になりて江戸へ下りし也。橘翁村田などに歌は学たり。其比は下手にて有し也。有職の学にくはしかりしと也。漢学もありき。元明史略など撰せし男也。頓て八丁堀に居て、度々心安く出合せし也。源氏の調度を考て、図にして開板せんと心ざすよし語りき。其後七・八年経て成就せしやと橘翁迄問遣せしに、成就せぬよし云こされき。

（『続日本随筆大成』八―一三七頁）

○一柳千古

「江戸八丁堀に住す。字万。豫山と号。又章堂と云。千蔭門にして最も詠歌をよくし、又文章を以て専らとす。文政年歿す。」（『古今書画鑑定便覧』）

○井上文雄

歌人井上文雄の住所は、天保七年版『諸家人名録』に、茅場町植木店と記してあり、文雄は、明治四年この地にあって没した。

森銑三翁旧蔵の『広瀬六左衛門雑記』に、

井上文雄は北八丁堀に住。其門に遊ぶ人々、津山隠侯確堂を始、侯伯より庶人に至、甚多有レ之よし、摘英集は当時の人の歌を類題したる也。

（森銑三氏『広瀬六左衛門雑記抄』）

と記してあった由である。次に清宮秀堅の『古学小伝巻三』所収の伝記を引いておこう。

井上文雄は、称を元真と云。家の号を柯堂とよべり。田安藩の侍医なり。四十五後少より和歌を好まれ、初岸本由豆流に学び、後一柳千古を師とし、皇国の学をもいそしまれけり。其うち和歌に最も長ぜられたり。常に古人の家集を愛られけり。そは撰集の類は、撰者等所好の風のみを取り、作者の真面目を失へば、善悪とも家集を讀むに如くはなしとなり。又新古今集以前寛治比の歌の常語を、みやびに甘く取り回せる姿を好まれけり。趣は替れども、景樹以後の歌口なりと、人々取りはやしけり。文雄少かりし時、任侠の風ありて、然諾を重んじ、人の困難を解くを以て任とせり。明治四年辛未十一月十八日風のこゝち重りて歿しぬ。年七十二。法号文雄院歌先妙道居士と云。谷中善光寺坂玉林寺先塋の次に葬る。翁平生得意の歌数多ある中に、

いかならんたへて桜のなしと聞く
唐土人の春の心は

空言を昔しの人はいはざりき誠に
月は今宵なりけり

抔最も人口に膾炙せり。又諷歌新聞と云、草野御牧が著せる書に、文雄の歌を載せて、

行末の頼みも今はなかりけり君が
千代田を人にかられて

徳川の濁りそそぐと逢瀬川潔き名を世に流しけり

此歌のことに付、一旦官より御不審を蒙りしかど、幾程も無くはれたりとぞ。又道のさきはひと云書を著せり。翁平生の志此書に見えたり。

○著書については、逸見仲三郎氏の『慶長以来国学者史伝』に、

古今集序考、八代集評論、和学弁、大和物語新註、冠註大和物語、大井川行幸和歌序考証、さきはひ草、道のさきはひ、調鶴集、和学法帖、詞林栞、摘英集、思草、仮字一新、伊勢の家苞、名字彙、名乗字引、柯堂枕談、歌堂随筆、歌堂叢考、歌堂初学抄、文雄翁歌集、続霊語通

などのあることを記している。

○なお、文雄の歌集『調鶴集』について、福井久蔵博士の『大日本歌書総覧下ノ一』に次のように評しておられる。

調　鶴　集　三巻

短歌、長歌及文章を次第せり。慶応二年門人佐々木弘綱の序を加へ、同三年出版。藤堂侯資を助けられしこと序に見ゆ。続歌学全書十一編にも収む。清新の歌風を好み一ふしおかしきところを狙ひたるが如し。『岡越のきりとほしたる作り道卯の花咲けり右に左に』『賤の女がまゆ煮る袖にこぼれけりわらやの軒の山栗の花』『長き日をうすねぶりする関守が目をつぶらかに鳴くほととぎす』

山田謙益編『明治現存三十六歌撰』明治10年

『弥陀たのむかたゐ嫗も折々はむかしの春の夢や見るらむ』の如き新しきもの、野趣に富むもの、奇警なるもの、さまくの体を詠ぜり。

○余談にわたるが、三村清三郎翁の『続貂書話』（三村清三郎集三一―三〇頁）に、井上文雄は「筆まめにて、何事をたのみても、こころやすく書きてくれし由。佃島の川柳五六代の碑は、住吉神社の平岡好国翁たのみて書きて貰ひしなるが、五世川柳の句は、やはらかくかたくもちたき人心なりしを、もちたしと文雄が改め書きしなりとぞ。」とある。

○大野定子

歌人井上文雄の子で、和歌を善くし

『文久文雅人名録』に、

和歌　定むる子　文雄女、日本橋坂本町
画　清可　文雄女、日本橋坂本町　大野定むる子
井上清可

と載っており、早くから歌人として聞え、山田謙益編『明治現存三十六歌撰』（明治一〇年刊）に、

加藤主計頭

世にたけきやまとこころにことさへぐからなでしこもたをりきにけりの詠を載せ、著書に『千題千首明治歌集一巻』がある。

○明治六年（一八七三）文部省の小学校令に基き、府下に官立小学校が設立を見た際、定むる子は、第三番小学校の教師になった。学校は、第一大学区第四中学校内―小石川伝通院境内にあった。同小学校設立伺に添えられた教師名簿に、次のようにある。

奈良県貫属士族、大野録三郎養祖母
大野定子
当三拾五才

旧幕臣井上文雄ヘ万延元年庚申九月ヨリ明治四年辛未十一月迄都合二十一ヶ年筆学修業。明治六年三月廿九日於二東京府一小学二等授業生被レ命。

（東京市史稿市街篇・明治期六―一、〇〇九頁）

＜口　医　家＞

○八町堀の医者町長沢町

八町堀に医者の受領地のあったことは、あまり知られていないが、元禄七年（一六九四）一二月一一日、本八町堀三丁目裏の酒井兵部上ヶ屋敷一七七六坪田舎間を公収して、幕府医員らの受領地とし、名主長沢嘉左衛門の支配に属し町名を立てて長沢町と称した。

（東京市史稿市街篇一一―二一六頁）

長沢町に屋敷を拝領した医師で名高いのは、元禄四年招命を受けて長崎から出府した外科医栗崎道有である。

○南蛮医方の栗崎家

栗崎家は長崎において南蛮医方をもって有名な家であった。その勃興については『長崎洋学史、下巻』西洋医術の条下に詳しい。（同書一四三頁以下）同書は云。

金創本末撰記に拠れば、栗崎家の祖は、肥後国宇土郡栗崎村の産であったが、故ありて長崎に移り住む事になった。その児童は、容貌端正、聡明英敏であったので、南蛮人が之を寵愛して海外に連渡り、南蛮の医方を学修せしめた。この童子は、成長するに至り、南蛮医方の蘊奥を極め再び長崎に帰りて医を業とし、遂に栗崎一流の祖となったと云ふ。この人物が、即ち世に初代栗崎道喜と謂ふ所の者に該当するのである。（以下三頁ほど省略）この初代道喜には四子があった。金瘡本末撰記に拠れば、長男道喜は、長崎にて医を業とし、名声遠邇に馳せてゐたが、越前侯松平氏の召聘に応じ、次男道悦は、平戸侯松浦氏に医を以て仕へ、三男道保は、性豪放にして仕官を好まず、医術に長けてゐたが、旦夕飲食恣なりしため、壮年に至りて食毒を発し自ら治し難きを覚りて、山林に幽居し、仏名を唱へて卒したと云ふ。四男道有は長崎に住み、しばくし諸侯より高禄を以て召され、自己も之に応ぜんと欲したが、長崎奉行所に於ては、道有を長崎に留めんが為め、役医に任じ、大に優遇したので、已む

を得ず長崎に留まる事になり、年齢五十歳に満たずして逝きしと云ふ。

○

栗崎兄弟の数多い門人の中で、傑出していたのは、道喜正元の門人鳥飼道節であった。道節は、道有正家の没後、道有の嗣子の後見となって、その教導に当った。鳥飼道節に扶翼されて成長した貞悦こそ、元禄四辛未年（一六九一）江戸に召されて、幕府の医官となった栗崎道有正羽なのである。

栗崎氏は、元禄四辛未年（一六九一）幕府の医官となりてより後、その逝去の年即ち享保十一丙午年（一七二六）の春に至るまで、三十有五年の間、江戸参礼の紅毛医師に質問する事を怠らなかった。一七〇二年元禄一五壬午年の春、甲比丹 Abraham Douglas、上外科医 Pieter Kesteloot などと対談した幕府の医官 Coerisacki の事は、Valentyn の日本記事にも見えるが、そのクリサッキは、栗崎道有正羽其人に外ならぬのである。（省略）栗崎道有正羽の子正堅も、父名を襲ぎて道有と云ふ。医官となりて御番外科に任ぜられた。当時名医と称せられ出藍の誉れがあった。彼も亦江戸参府の紅毛人に質問する事を怠らなかった。惜哉、元文二丁巳年四月二十八日を以て逝く。得年三十九。法名正堅。妻は宗対馬守家臣鈴木半兵衛の女であった。（長崎洋学史下巻一五五頁以下）

元禄一三年三月十四日、殿中松の廊下において浅野内匠頭の遺恨の刃を受けた吉良上野介の創の手当をしたのはこの話題の人、栗崎道有正羽であった。

道有正羽は、享保一一年一一月二〇日六三才で没した。法諡は瑞雲院殿暢岳正羽居士。墓は、中野区上高田二丁目三二、功運寺と万昌院の二寺合併墓地にあるそうである。

× × ×

外科担当の奥御医師栗崎道有の拝領屋敷は八丁堀長沢町にあり、代々その地に住んだらしい。長沢町周辺には奥医師の拝領屋敷が数軒あった。文化元年武鑑によると、

御外科　栗崎道有　二百俵、北八丁ほり永さわ丁

表御番医師

藤本立泉　二百俵、ちぞうばし

遊佐九渕　父卜庵、北八丁堀

遊佐九卜　二百俵、北八丁堀、永さわ丁

表御番外科

栗崎道巴　二百俵、北八丁ほり、永さわ丁

のごとくにある。なお、嘉永七年刊行近吾堂版「本八丁堀辺之絵図」長沢町の条に「栗崎道有」の名が見える。

長沢町の西側通り、住昔の「タキダショコ丁」は、震災後の土地区画整理で拡張されて「新大橋通り」となり、長沢町の西側半分は道路敷となった。

道有屋敷も半分は道路になってしまったが、残った現在の八丁堀三丁目二二番地辺がその旧地かと思われる。

後に記すように道有屋敷内には、兵学者山県大弐の学塾があった。この点大いに一般の注意を喚起しておきたい。

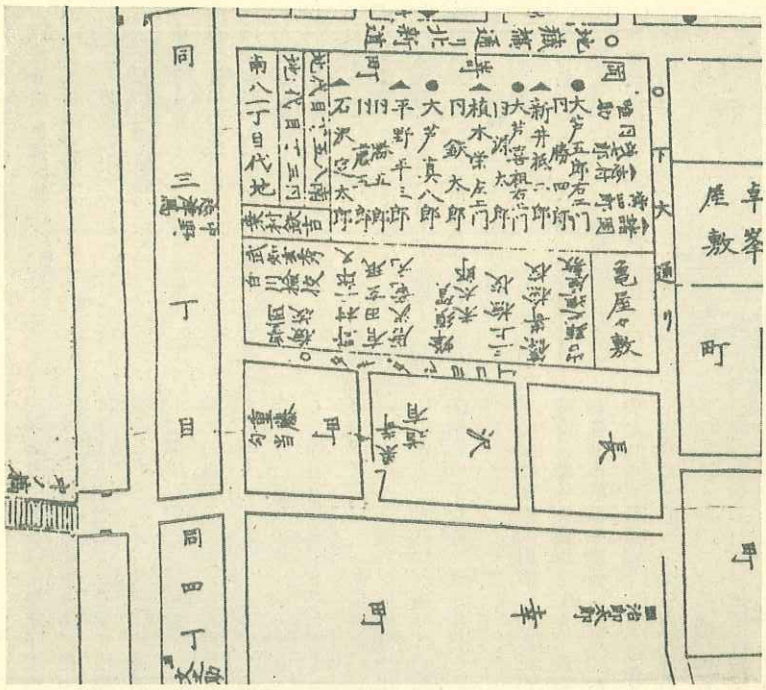
幕末の八町堀地区の切絵図を見ると茅場町の与力屋敷の貸屋内に、何人もの医師を見出す。安政六年武鑑に見える

太田元礼　奥御医師　二百俵、八丁堀

湯浅堯民　御目見医師　うらかやば丁

渡辺雄伯　寄合御医師　百俵五人フチ　かやば丁八丁堀

佐藤文仲　御目見医師



近江屋板江戸切絵図『改正本八丁堀辺図』嘉永7年
▲長沢町の栗崎道有屋敷に注意。
（中央公論刊　江戸切絵図集成第巻より）

戸塚静海　奥御医師　三十人フチ　八丁堀代官丁

といった人達である。

これら諸家の中で、もっとも卓越していた人は戸塚静海である。

松崎慊堂先生の『日暦』天保一二年四月二九日の条下に

戸塚静海、八丁堀代官屋敷、薬師裏門通新道角

とその住所が記されている。

○戸塚静海

戸塚静海の伝は、富士川游博士の「本朝医人伝」（富士川游著作集七所収）に詳しい。文語体で記すのを和らげて抄記する。

先生名は維泰、字は藻徳、通称は静海、晩年春山と号した。遠州掛川の人。父培翁は医をもって藩侯に仕えた。三子あり、先生はその末子であった。一八才の時藩医十束井斎に従って蘭書の手ほどきを受け、漢学を松崎慊堂に受けた。二二才の時宇田川榛斎に入門して蘭学を学び、師の勧めに従って長崎に赴き、シーボルトの門に入って医学を学んだ。居ること数年、文政一二年たまたまシーボルトの獄起り、連座して囚われたが、数か月にて赦さるるをえた。

シーボルト国外追放後、先生なお長崎に留ること八年、再び江戸に帰って茅場街に業を開く。声望日ごとに盛んであった。

先生は初め太田侯に仕えたが、後、薩摩侯請うて藩医とした。侯卒する後安政五年将軍温恭公（家定）病篤し。すなわち、幕府、先生および伊東玄朴、竹内玄同らを挙げて奥医師に補し、法印に叙す。西洋医家の侍医に挙げらるること実にここ始まる。

先生人となり恬静寡欲、専ら精業に勉め、およそ世間の紛華勢利の習には些も意に介する所がなかった。明治九年一月病で家に没す。年七八。義子文海、業を受け盛名あり、官に仕えて海軍軍医総監に至る。

戸塚静海
（大日本名家肖像集より）

○宇田川槐園

茅場町居住洋学医に、なお宇田川槐園の居ることを逸するわけにゆかぬ。槐園名は晉、字は明郷、玄髓と号した。江戸の人。宝暦十年父道紀の病が危篤になった時、晉はまだ五才で、幼少だったので、道紀の弟子潜を嗣子とし、子潜はまた晉をもって自らの嗣子とした。子潜は江戸の津山藩邸内に住んでいた。晉年十三を過る頃、子潜に孝経を学ばんことを請い、これよりして学日に進み、日夜勉学を怠らず、灯を掲げて書を読み鶏鳴に至るを常とした。

すでにして儒学・医方に優れ、兼ねて遠西の学に通じ、藩医に挙げられ、秩禄また多きを加えた。かって茅場町に住んだころ、庭に槐樹の大木があったので、門人弟子ら晉を称して槐園先生の号をもってした。

槐園二五才のころ、大槻玄沢の門に入って蘭学を始め、後、杉田玄白、前野良沢、桂川甫周にも学んだ。甫周はことにその才を愛し、遠西の学は子を得て伝うるに足るとて「ヨハンネスゴルテル」の内科書（一七七四年版）を与えて翻訳を勧めた。槐園この書を得て刻苦一〇年『内科選要』一八巻を完成した。わが邦蘭学創始後二〇年にして始めてこの内科書の邦訳あり、西洋に進歩せる内科あるを知らしめ、後進を啓蒙した功績は大きい。著書は、内科撰要一八巻のほかに遠西名物・東西病考・遠西草木略・西洋医言・蘭畝俶載・蘭訳弁髦・西文矩などの諸篇があり、寛政九年一二月一八日に没した。年四三。浅草誓願寺に葬る。墓は誓願寺内長安院にある。（続洋方医伝ほか）

◇ 東京を語る会　第43回

日時　十月六日（土）
　　午後二時～三時三十分

演題　大正の銀座と広告会社

講師　瀬田　兼丸　氏
　　（瀬田広告研究室）

銀座は、広告会社を生んだ、広告代理業発祥の地である。

瀬田氏は、大正三年から広告業界に入り、最近「日本最古の広告会社ザ／弘報堂」を刊行されています。大正期の銀座が微細に描かれています。

お誘いあわせてご来場下さい。